

内村鑑三 —日本のキェルケゴール—<sup>\*1</sup>

梶形 公也

## 序

周知のように、内村鑑三はヨーロッパの人々から「日本のキェルケゴール」と呼ばれた。それは特に、彼らが内村の『余は如何にして基督信徒となりし乎』を読んで、そこにキェルケゴールと同じ思想を読み取ったからである。しかし、一方で、日本人がキェルケゴールを研究することに対して、今でもなぜ日本人はこれほどまでにキェルケゴールに関心を抱くのか、ということがヨーロッパのキェルケゴール研究者から尋ねられることがしばしばある。

本発表は、内村鑑三が日本のキェルケゴールと呼ばれるのはなぜかということ、『余は如何にして基督信徒となりし乎』に即して明らかにすることによって、日本人のキェルケゴールへの関心が深い理由を持っていることを示すことが目的である。従って、内村鑑三とキェルケゴールとの思想的連関（無教会運動と単独者など）や、場合によっては、内村の信仰の発展をキェルケゴールの段階理論で跡付けるといったようなことは、次の課題となる。

## 1. 『余は如何にして基督信徒となりし乎』の出版の時期

『余は如何にして基督信徒となりし乎』は1893年（明治26年、内村数え年33歳）12月に完成し、1895年（明治28年）5月に出版された。1888年5月に内村はアメリカから帰国し、1889年7月1日に横浜加寿子と結婚した。この年の2月には明治憲法が發布され、翌年の10月に教育勅語が発令された。この教育勅語発令の一ヶ月前、内村は第一高等中学校での職を得た。1891年1月9日、彼は教育勅語奉読式で「礼拝」をしなかった。その結果として、彼は非難中傷を

\*1 本発表は昨年（2023年）の12月、ウクライナのキエフで開催されたキェルケゴール・コンファレンスでの講演が元となっている。

浴び、自ら辞職せざるを得なかった。

内村は、同年の5月6日付けのアメリカの友人ベルに宛てた手紙でこう書いている。

「前便をしたためて以来、私の生活は実に多事でした。一月九日に私の教鞭をとる高等中学校で教育勅語の奉戴式が挙行され、校長の式辞と上述の勅語奉読の後、教授と生徒とは一人一人壇上に昇って、勅語の宸署に敬礼することになりました。その敬礼は我々が日常仏教や神道の儀式に於て祖先の靈宝の前にささげている敬礼です。この奇妙な儀式は校長の新案になるもので、従って私はこれに所すべき心構えを全く欠いていました。しかも私は第三番目に壇上に昇って敬礼せねばならなかったため、ほとんど考慮をめぐらす暇もなく、内心ためらいながらも、自分のキリスト教的良心のために無難な途をとり、列席の六十人の教授（凡て未信者、私以外の二人のクリスチャンの教授は欠席）及び一千人以上の生徒の注視をあびつゝ、自分の立場に立って敬礼しませんでした！ おそろしい瞬間でした。その瞬間、私は自分の行動が何をもたらしたかを知りました。元來この学校に於ける反キリスト教的感情は昔も今もすこぶるはげしく、我々の側の柔和や懇切位の事では到底緩和すべくも無いほど面倒なものです、それが、今こそ、国家と元首に対する非礼のそしりをば、私に、また私を通じて一般のクリスチャンに、かぶせ得る絶好の動機（と彼らは考えます）を見つけたのです。まず数人の乱暴な生徒が、ついで教授たちが、私に向かって石をふり上げました、国家の元首が非礼を加えられた、学校の神聖がけがされた、内村鑑三のような悪漢国賊をこの学校におく位ならば、むしろ学校全部を破壊するにしかず、というのです。事件は校外に波及し、新聞紙はこれを取り上げました。（中略）そのうちに私ははげしい感冒にかゝり、数日にして危険な肺炎に進んでしまいました。哀れな妻と母とは昼夜の別なく私の病床につき切り、その間にも、外は無慈悲な社会が猛り狂いました。」\*2

\*2 『内村鑑三全集』（岩波書店、1980-1984）第36巻、331-332頁。山本泰次郎譯『内

このよう状況によって、内村鑑三は財政的にも精神的にも苦難を体験することとなった。この事件は、キェルケゴールのホルサー事件にも類するものであろう。

この奉戴式の前夜、内村は彼の親友の宮部金吾に手紙を書いて、札幌独立教会を辞めたいと伝えた。その理由は「軽いものではない」と内村は語っているが、それを彼は明らかにしてはいない。一般に、彼の行為が他の人に累を及ぼすことを彼は恐れたからと考えられている\*3。内村のこのような思慮ある態度は、キェルケゴールが『瞬間』においてキリスト教界を攻撃する前に示した行動を思い起こさせるであろう。

内村は「不埒な教師」、「不忠の臣」として非難された。そして、1891年2月3日に、内村は依願解嘱となった。

一度は収まったこの事件は、1893年1月に井上哲次郎が「教育と宗教の衝突(一)」を発表することによって再び世間の耳目を集めることになった。この井上の論評に対して、内村は、同年3月15日「文学博士井上哲次郎君に呈する公開状」を発表し、井上を痛罵した。当時の雑誌は内村に味方したというものの、この間の孤独はいかばかりであったろうか。

内村は当時の状況と社会全体から孤立している感覚を『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中で書いている。

「…そして十年間、摂理の手はつらく我々を取扱い、我々は幾多の深い淵を通過せしめられたけれども、また我々が告白した信仰は我々をして世人の眼には嫌悪の情を起こさせるものたらしめ、人生の快樂の多くは彼の御名のために放棄せられることになったけれども、余は信ずる、我々は今なお我々の天上の主に対する愛と忠誠においては国内の他のいかなる家にも劣るものではないと。四年前に、もう一人の家族が我々の家に加えられた。彼女は『異教徒』として我々のもとに来た、しかし一年のうちには、

---

村鑑三 ベルにおくった自叙伝的書翰』（新教出版社、1949年、54-56頁）なお、内村の文章の漢字引用は、印刷を考慮してなるべく現代の表記に直した。

\*3 同上書、329-330頁。また、同上書解題、571-572頁と John F. Howes, *Japan's Modern Prophet, Uchimura Kanzo, 1866-1930*, UBC Press, 2005, p. 72 以下とを参照。

いかなる婦人も彼女より以上にその主なる救拯主に忠実ではなかった。善き主は彼女を、わずか一年半我々のもとに留まらせてだけで、我々から取り去りたもうた。しかし彼女は主と祖国のためにまことに気高く戦ったのち、彼に信頼しつつ彼の歡喜と祝福に入った。」\*4

このような苦難の状況下で、内村は教職に就くべく、転居を繰り返したが、最後には文筆業で生計を立てる決心をした。この間、彼は多くの著作や論説を残すことになるが、その生産力はやはりキェルケゴールと比較することができよう。

## 2. ヨーロッパ諸国における『余は如何にして基督信徒となりし乎』の印象

1893年12月、内村は『余は如何にして基督信徒となりし乎』を完成した。それは、1895年5月に日本で出版され、11月には *The Diary of a Japanese Convert* というタイトルのもとにアメリカで出版された。

この著作は公衆の注意を惹かなかつたが、ウィルヘルム・グンデルト (Wilhelm Gundert, 1880-1971) \*5によって発見された。彼は、彼の友人にドイツ語訳を依頼し、彼の父親の経営する出版社から出版した。それは1904年のことであり、日本では日露戦争の最中であつた。この翻訳はドイツとスイスでかなりの反響を呼び\*6、後にはヨーロッパ諸言語で翻訳された\*7。

\*4 『内村鑑三全集』第3巻、英文53頁。鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒となりし乎』(岩波文庫)74頁。

\*5 1906年、グンデルトは内村を訪問し、彼の隣に住んだ。グンデルトはドイツにおける日本学を基礎づけた。

\*6 内村は、1904年7月31日付のベルへの手紙の中で、「拙著のドイツ語版の大成功を喜んで頂けると思います。初版三千部はたちまち売りきれ、目下第二版を売り出し中の由で、多くの有力な権威者らが懇切に批評してくれかつ「心からなる同意」を示してくれました。同時に私は、初版売り上げ代金の一部として、ドイツ貨で三百マルクを送られました。(中略)何よりもうれしい事は、拙著が一宣教師を日本に派遣する動機となり、売り上げ金がその日本までの旅費の一部となった事です。」(『内村鑑三全集第37巻』26頁。山本泰次郎譯『内村鑑三 ベルにおくった自叙伝的書翰』223頁)

\*7 この間の事情に関しては、鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒となりし乎』訳者解説参照。

読者の中には内村に手紙を書いたものもあり、後に彼を「日本のキェルケゴール」と呼んだ人もいた。これらの手紙のいくつかをここで紹介する。

デンマーク語訳者M. ヴォルフは序言でこう書いている。

「…彼の思想はセーレン・キェルケゴール Søren Kierkegaard の思想と非常によく似ている。」\*8

1911年にデンマークの牧師、C・A・Skovgaard-Petersen は日本を訪問し、内村と面会している。彼は内村の印象を“Fra Nutidens Japan”（現代の日本から）（1911）に書いている。

「もちろんカンゾ・ウチムラ（鑑三・内村）は、私が東京にいたときに訪問した一人である。『余は如何にして基督者となりしか』という著書において、自分の信仰の発展を生々と美しく描いた人物に会うことは歓ばしかなかった。周知の如くこの書はデンマーク語にも訳されている。（中略）ウチムラは日本の教界において特殊な位置を占めている。彼は聖書に精通し、聖書の遵奉者であるがたしかに一風変わっている。どの教派にも教会にも属さない。彼はいはば、日本のキェルケゴールである。彼の発行している雑誌に時折キェルケゴールからの引用がある。といっても彼は深くキェルケゴールを知っているわけではなく、主に独乙の友達を通じて間接に知っているにすぎない。」\*9

『余は如何にして基督信徒となりし乎』の日本語訳をした鈴木俊郎は、その訳者解説の中で、内村とキェルケゴールとを結びつけるエピソードを紹介している\*10。その一つは、スウェーデンのキェルケゴール研究者W・ルーディン

\*8 Kanzo Uchimura, *Hvorledes jeg blev en kristen: udtag fra min dagbog*, Schönberg, 1906, Oversætterens Forord. ちなみに、この翻訳は Bianco Luno 印刷所で印刷された。

\*9 Carl Axel Skovgaard-Petersen, *Fra nutidens Japan, personlige indtryk af C. Skovgaard-Petersen*, København, 1911, Übersetzt von H. Gottsched, *Aus Japan, wie es heute ist, Persönliche Eindrücke von C. Skovgaard-Petersen*, Basel, 1912, S. 122-123, 中沢治樹訳「—デンマークの人見た主筆カンゾ・ウチムラ」（『聖書の言』247号、1956年5月、16（104）頁）また、中沢治樹『忘却と想起』（山本書店、1972年）167頁参照。

\*10 鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒となりし乎』訳者解説、282 - 283頁参照。

が、1912年11月8日付の手紙を添えて、自分の著書、*Sören Kierkegaards Person och Författarskap* (1880) を内村に贈呈し、その手紙で、「或人はいう、貴君は寧ろ孤立の状態にあり、いかなる教派にも属せず、基督信徒の間に悲しむべき分離を生ぜしめていると。また私は聞いた、貴君はデンマーク国のゼーレン・キェルケゴールについて知る所があると。彼こそはまさに『個人的基督教』の代表者である、彼の国人の預言者と称されるべき人である。」と書いていることである。また、もう一つは、時期的には少し後になるが、1926年(大正15年)8月8日の内村の日記の紹介である。それによると、ミュンヘンの出版業者A・アルバースは内村に宛てた手紙の中で、「具体的基督教はタルソの猶太人パウロの基督教である。阿弗利加カルタゴの修辞学者アウガスチンのそれである。独逸マンスフェルトの百姓の子ルーテルのそれである。丁抹国コペンハーゲンの敬神家を父母に持ちしキェルケゴールのそれである、而してまた日本人たる内村のそれである。」\*11と書いた、ということである。

### 3. どうしてヨーロッパ諸国の読者は『余は如何にして基督信徒となりし乎』のうちにキェルケゴールを見たのか？

19世紀末から20世紀初頭にかけて、キェルケゴールはドイツで多くの読者を得た。内村のこの本は1904年にドイツ語訳が出版された。その5年前に、GottschedとSchrenpf訳のドイツ語版キェルケゴール全集第一版が出版された。キェルケゴールの著作の最初のドイツ語訳は、1861年に出版された『瞬間』である。そして翌年には『自省のために、現代にすすむ』が出版された。1862年から1904年までにはキェルケゴールの仮名著作の多くがドイツ語訳された。

また、ブランデスの『キェルケゴール』のドイツ語訳は1879年に、ヘフディングの『哲学者としてのキェルケゴール』のドイツ語訳は1896年に出版されている。当時のドイツ語圏でキェルケゴールに注目していた人物には、ディルタイ、R・カスナー、リルケ等がいた。キェルケゴールへの関心が高まる中で、

---

\*11 『内村鑑三全集』第35巻、83頁。

グンデルトは内村を発見したのである\*<sup>12</sup>。

グンデルトは、なぜ、『余は如何にして基督信徒となりし乎』を読んで日本を訪れ、内村のもとで生活をしたのか。彼は内村の内に、一人の誠実な若者、キリスト教の教えに出会い、決定的な回心を経験し、自分自身をキリスト教の真理と一致さすべく、その福音の故に苦難を背負った、一人の誠実な青年を見たのである。彼は、内村の『余は如何にして基督信徒となりし乎』がキェルケゴールのキリスト教思想を重複していると考えたのである。

## 4. ヨーロッパ諸国の読者は『余は如何にして基督信徒となりし乎』のどこにキェルケゴールを発見したのか？

### 4-1. アメリカにおける「教会」、既存のキリスト教そして牧師に対する内村の攻撃

#### 教派主義の弊害

内村たち七人の信仰の兄弟は、「玩具の教会」ではなくて、「実際の教会」を建てる計画を抱き始めた\*<sup>13</sup>。しかし、そこに至るには大きな困難が生じた。それは「教派主義の弊害」\*<sup>14</sup>であった。

\*<sup>12</sup> W・グンデルトがどうして内村のこの書物を知ったかということに関しては、本書の和訳者、鈴木俊郎はその訳者解説で「彼が後年日本で本文の訳者に語ったところによれば、ある日彼は日本のYMCA機関紙『開拓者』の英文欄に『余は如何にして基督信徒となりし乎』の著者内村鑑三に関する記事を読み、日本からその書を取り寄せて一読し、ふかい感激にうたれた」（同訳書282 - 283頁）と記している。しかし、YMCAの歴史によると『開拓者』の創刊は1906年である。となるとドイツ語訳が1904年に出ている以上、時間的な齟齬が出ることになる。しかも、『開拓者』の創刊号には内村の紹介記事はない。これは、グンデルトの記憶違いかもしれない。また、ヘレーネ・グンデルト夫人の「回想録」によると、1902年、デンマーク〔現在のノルウェーの首都オスロ、当時はスウェーデン領のクリスチャニア。筆者注〕で開催された国際基督教学生会議の席で、宍戸元平に会い、本書を知ったという。当時グンデルトはドイツ基督教学生会協会の会員であり、1904年から1905年にはその書記であった。（鹿子木敏範編『ウィルヘルム・グンデルト生誕百年記念特集』（*Zum 100. Geburtstag Wilhelm Gunderts. Gedenkschrift*）。10, 1980）46頁参照。また鹿子木氏によれば、グンデルトが日本に来ることにしては、キェルケゴールの思想との出会いが決定的要因であったという。同上書、15頁参照。

\*<sup>13</sup> 同上書、50頁、同上訳書、70頁参照。

\*<sup>14</sup> 同上書、40頁、同上訳書、57頁。

彼らが新しい教会の建設を計画したとき、アメリカ・メソジスト監督教会が400ドルの援助を与えてくれた。彼らはその援助を、与えてもらうというよりも、むしろ借りるという決断をした。彼らは自分たちの教会の独立を欲したからである。そして彼らは自分たちの考えを400ドルの援助の仲介をしてくれた牧師に説明した。その牧師は彼らの意図が気に入らなかった。そして彼らに手紙を送り、独立した教会を建てるという彼らの計画には同意できないと述べ、援助した金の一部でも返済するように求めてきた\*15。

1882年12月、彼らは借金を完済し、彼らの独立を得た。その教会は札幌独立教会と名付けられた。その「教会の信条は使徒信条であった。教会規律は五年前に」彼らの「ニュー・イングランド教授によって起草された『イエスを信ずる者の契約』であった。」\*16 内村は独立の意義について、「独立は自分自身の能力の意識的自覚である。そしてこれは人間の活動の分野における他の多くの可能性の自覚の端緒であると余は信ずる。」\*17 と書いている。

内村はこの「教派主義の弊害」をアメリカで決定的に体験した。彼は、「アメリカは教派の国であり、各自は他を犠牲にしてその数を増大しようと試みる。すでにユニテリアン主義、スウェーデンボルグ主義、クエーカー主義、等々のようなかかる見なれない諸主義が、他の余がすでに熟知しているものと言うにおよばず、余に対して試みられつつあった。」\*18 これらの「イズム」によって彼は甚だしい疑惑に苦しめられ、彼はどれを取るべきか困惑せざるを得なかった。その結果、彼は「それらの何一つをも受けまいと決心した。」\*19 彼は、「真理の『選択』との恐ろしき争闘」の中で、「人間ノ意見ハ多様ナリ、然レドモ神ノ真理ハ一ナラザルベカラズ。神御自身ニヨリテ教ヘラルニ非ズンバ、真ノ知識ヲ獲ル能ハズ」と告白した\*20。このような経験の結果、彼は「無教会」を建て、聖書にのみ拠るという自覚を持つに至ったのである。

\*15 同上書、59頁、同上訳書、82頁参照。

\*16 同上書、56頁、同上訳書、78頁。

\*17 同上書、65頁、同上訳書、90頁。

\*18 同上書、102頁、同上訳書、142頁。

\*19 同上書、102-103頁、同上訳書、142頁。

\*20 同上書、103頁、同上訳書、142頁。



### アメリカという基督教国における非基督教的特徴

内村の「基督教国の第一印象」は『余は如何にして基督信徒となりし乎』の第六章で印象的に記述されている。彼の「基督教的美リカ観は高潔で宗教的でピューリタンのであった。」\*<sup>21</sup> 彼の「アメリカのイメージは聖地のそれであった」\*<sup>22</sup>。というのも、彼は「すべて高貴なもの、有用なもの、向上的なものを英語という運搬車を通して学んだ」\*<sup>23</sup>からである。しかし、彼は徐々に「この子供らしい想念を捨て去った」\*<sup>24</sup> 彼が最も憤慨したものは、彼がアメリカで見た人種差別であった。「他のいかなる点においても、しかしながら、基督教国はその人民の間に依然として存在している強い人種の偏見の点においてより以上に余に異教国のように見えたことはない。」\*<sup>25</sup>

そして、次のように彼は断定する、

「もしも今日のいわゆる基督教国をつくったものが基督教ならば、天の永遠の盟いをしてその上にとどまらしめよ！」\*<sup>26</sup>

### 神学校の実態

内村は武士の家庭に生まれた。武士は実用、清廉潔白、金銭に対する正直を重んじた。彼は生まれながらにして、「生るは戦うなり」(vivere est militare) \*<sup>27</sup>ということを押き込まれていた。彼は「坊主」こそ最も非実用的であると考えており、職業的牧師を心の底から嫌悪した。しかし、アマースト大学での回心の後、彼は神学を「神-学」つまり神についての学と考え始めた。彼は自分の神学観の変化を以下のように説明している、

\*<sup>21</sup> 同上書、79頁、同上訳書、109頁。

\*<sup>22</sup> 同上、同上訳書、110頁。

\*<sup>23</sup> 同上。同上訳書、109頁。

\*<sup>24</sup> 同上書、80頁、同上訳書、111頁。

\*<sup>25</sup> 同上書、83頁、同上訳書、115頁。

\*<sup>26</sup> 同上書、89頁、同上訳書、123頁。

\*<sup>27</sup> 同上書、8頁、同上訳書、12頁。

「靈的経験の日々に増し加わる現実感が、余を助けて余がかつて神学に結びつけていた空虚さと非実用性との観念をことごとく駆逐せしめたのである。じつに余は余の神学嫌悪の理由が判った。もし米や馬鈴薯が現実であるように靈が現実であるならば、何故に神学を軽蔑して農業を賞讃するのであるか。もし穀物を生長させて余自身と余の飢えている同胞とを神の大地の果実をもって養うことが高貴であるならば、彼の御靈を我らの飢えている靈魂のものとするため彼の律法について学び、それによってより高貴により男らしくされることが、何故卑しむべきであるか。」\*28

こうして、アマースト大学修了後、内村は神学を勉強するために Hartford Seminary に入学した。しかし、彼は、

「心の中で言った、『主よもし、貴神<sup>あなた</sup>が私をレヴェレンドとなることを強制したまいませんかならば私は神学を学ぶであります、もし基督教国のあらゆる神学を取り入れることに成功しましても、私は二重のDによって示されたあの重々しい称号を私の名に加えないであります、貴神は私を私のこの最後の犠牲のためにそれから免除してくださらなければなりません』と。」\*29

神はこれに同意し、彼は「その同意に基づいて一神学校に入学したのである。」

しかし、やはり神学校は彼のいる場所ではなかった。彼は神学校の学生たちの雰囲気とそこの神学者の教育内容に絶望した。彼はその時のことを日記に書

\* 28 同上書、133 頁、同上訳書、186 頁。ここで、「彼の御靈を我らの飢えている靈魂のものとするために」という表現で和訳されている原文は、“to appropriate His Spirit to our hungering souls” という表現である。この appropriation はキェルケゴールの術語である “Tilegnelse” を思い起こさせる。内村は他の箇所でもこの言葉を用いている。例えば、法王の権威に疑義を挟んだ上で、こう主張する、「問題全体の核心は彼御自身である、そして人々は彼を自分のものとする途において異なるのである。」と。(同上書、122 頁、同上訳書、170 頁)

\* 29 同上書、134 頁、同上訳書、187 頁。

いている、

「十月十二日（中略）無精神ノ神学ハ凡テノ学問ノ中ニテ最モ乾燥無味ニシテ最モ無価値ナルモノナリ。重大ナル問題ヲ論ジツツアル間ニ笑イ戯レツツアル学生ヲ見ルコトハ殆ド慄然タルモノアリ。彼等ガ真理ノ根底ニ達シ能ワザルハ怪シムニ耐エズ。千歳ノ岩ヨリ生命ヲ引キ出スハ最大ノ熱心ト真劍サヲ必要トス。

十一月三日 余ハ『ネバナラス』ヨリヨリ高キ道德ヲ求メツツアリ。余ハ神ノ恩恵ヨリ来ル道德ヲ渴望シツツアリ。然シカカル道德ハ人類ノ大多数ニヨリテ拒否セラルルノミナラズ、神学校ノ学生ト教授ニヨリテ信ゼラルルコト甚ダ少ナキガ如シ。余ハ此ノ神聖ナル壁ノ中ニテは、外側ニテ聴ク所ノモノヨリ何等新シキモノ、異ナレルモノヲ聞カズ。孔子ト仏陀トハ、是等ノ神学者ガ僭越ニモ異教徒ニ教エントシツツアル所ノ最大部分ヲ余ニ教エ得ルナリ。

十一月七日（中略）嗚呼我が靈魂ヨ、主義トイフ主義ヨリ離レヨ、ソレガ「メソジスト」主義デアレ、組合主義デアレ、或ハ他ノ如何ナル高尚ニ響ク主義ナリトモ。真理ヲ求メヨ、汝自身ヲ一個ノ人間ノ如クニ振舞ヘ、人々ト絶テ、而シテ汝ノ上ヲ仰ギ見ヨ。」\*30

聖職者免許をもつことの恐怖を一層大きくしたのは、「説教が豚肉やトマトやカボチャがもつような市場価値をもつ」という事実であった。彼の宗教観は「宗教は普通には現金に替えらるべきものではないのである。じつに宗教が多ければ多いだけ現金は少ない」\*31というものだった。

これらの引用を見れば、どうして内村の考えが『不安の概念』におけるキェルケゴールの思想と比較することができるかは容易に見て取れよう。ここでの

\*30 同上書、135-136頁。同上訳書、188-189頁。

\*31 同上書、139頁。同上訳書、194頁。

内村の強調は、「罪に対応する気分は真剣さである」\*32というキェルケゴールの「真剣さ」の説明を思い起こさせる。我々はまた、内村が求めた『『ネバナラヌ』ヨリヨリ高キ道德』はキェルケゴールの第二（新しい）倫理学と言っても差支えない。さらに内村の「真理ヲ求メヨ、汝自身ヲ一個ノ人間ノ如クニ振舞ヘ、人々ト絶テ、而シテ汝ノ上ヲ仰ギ見ヨ。」という表現は、キェルケゴールの「ギレライエの手記」を思い起こさせる。

内村は、以下のような確信をもって、日本に帰国した。

「基督教国の正しい評価を為すに当って、我々が何よりもまず、純粹單純な基督教と、その教授たちによって裝飾された教義化された基督教との間に、厳格な区別を設けることは必要かくべからざることである。」\*33

#### 4-2. キェルケゴールの思想を連想させる『余は如何にして基督信徒となりし乎』における他の表現

##### 真理と理念

「我々は基督教は真理であると言う。しかしそれは定義し得べからざるものを他の定義し得べからざるものをもって定義しているのである。『真理とは何ぞや』と、ロマンピラトやその他の不誠実な人々によって問われている。真理は生命のように定義するに最も困難である。しかり不可能である。（中略）生命の真の知識はそれを生きることによってのみうまれる。解剖ナイフと顕微鏡はその機制を示すにすぎない。——真理がそうである。我々はそれを守ることによってのみそれを知るにいたるのである。（中略）

そのようにして余は基督教の定義不可能性は、その非實在の、いわんやそのごまかしの、証拠でないことを知るようになった。余がその教に一致す

\*32 SV IV, 320. なお、この後に続く、第一倫理学と第二（新しい）倫理学との関係を論じている箇所を参照。

\*33 内村、同上書、145頁、同上訳書、203頁。

ればするほどそれが余にいっそうすぐれたものとなるという事実が、無限の真理そのものとの密接な関係を示すのである。」\*34

この内村の記述、特に「生命の真の知識はそれを生きることによってのみうまれる」は、即座にキェルケゴールのギレライエの手記の記述「真理とは理念のために生きる以外の何事であろう？」(Pap. IA 75, s. 55)を連想させる。

### 救いと信仰

「余ノ靈魂ノ救拯ハ、余ノ環境ト此ノ世ノ運命トノ状態如何ニ全然無関係ナリ。(中略)神ノ靈余ノ心ニ直接ニ触ルルニ非ズンバ、如何ナル回心モアリ得ベカラズ。何タル慰藉深キ思想ヨ！(中略)救拯ハ神ノモノナリ。而シテ如何ナル人モ物モ境遇モ余ヨリ其ヲ奪ウコト能ハズ。」\*35

「主ヨ、余ノ全然タル無能力ト墮落トラ認ムルガ故ニ、余ハ貴神ノ許ニ到リテ、貴神ノ生命ヲ以テ満サレントス。余ハ潔カラズ、余ハ貴神ニ余ヲ潔メ給ハンコトヲ祈ル。余ニ何等ノ信仰アルナシ、貴神ガ余ニ信仰ヲ与ヘ給ヘ。」\*36

ここで述べられた救いと信仰への内村のパトスは、まさにキェルケゴールが『哲学的断片』で展開した、「教師および救い主としての神」、真理理解の条件としての信仰、この信仰は教師自身が与えるものであるという思想、神のみが教えることができるものとしての「罪の意識」、逆説としての神、そして「この逆説は二重性をもって自らを絶対的なものとして示す。つまり、消極的には罪の絶対的差異性を生み出すことによって、積極的にはこの絶対的差異性を絶対的平等性へと止揚しようとすることによって」(SV2 IV, 240-241)ということを生きたことを示していると言えよう。

### 野心の欠乏と野心の過剰

「各人ノ生涯ニハ神ノ予メ定メ給ヒシ一種ノ語形変化表<sup>パラダイム</sup>アリ。彼ノ成功

\* 34 同上書、146頁、同上訳書、204-25頁。

\* 35 同上書、120頁、同上訳書、167頁。

\* 36 同上書、128頁、同上訳書、178頁。

ハ、此ノ語形変化表ニ自己ヲ一致セシメ、ソレニ及バザルコトナク、ソレヲ超エザルコトナキニアリ。其所ニノミ完全ナル平和アリ。彼ノ心身ハソノ中ニ歩ム時ニ最モ善ク有利ニ用ヒラルルナリ。野心ノ欠乏ハ彼ヲソレニ達セシメザルコト屢々アリ、彼ハ己ガ能力ヲ傾倒シテソノ事業ヲ成就セシムルコトナクシテ此ノ世ヨリ去ル。他方ニハ、野心有り余リテ彼ヲシテソレヲ跳ビ越サシメ、ソノ結果ハ五体ヲ毀ヒ死ヲ早ム。人ノ選択力（自由意志）ハ此ノ語形変化表ニ自己ヲ合致セシムルニアリ。一度自己ヲソノ流ニ投ゼンカ、彼ノ費ス努力ハモハヤ彼ヲ前進セシムルコトニアラズ、タダ流ノ中ニ彼ヲ止メ置クコトノミ。（中略）神ハ汝ノ流ヲ定メ給ヘリ、彼ハマタ汝ノ為ニ船長ヲ定メ給ヘリ。『彼汝ニ聞ケヨ！』\*<sup>37</sup>

この論述は、私にとっては、『死に至る病』の有限性と無限性の絶望の記述を想起させる。

## 5. 内村とキェルケゴールとを結びつけるもの

### 武士道と敬虔主義の精神

内村は16歳にしてキリスト教と出会った。そして彼はクラークによって書かれた契約にサインを強要された。若い内村にとってこの契約のどこが重要であったかといえば、それは「十字架上の彼の死によって我々の罪のために贖いを為したもうたかの救拯主に我々の愛と感謝とを示さんがために真の忠誠 (fidelity) をもってすべての基督信徒の義務を果たすこと」、「そして彼の栄光の増進と彼が代わって死にたもうた人々の救拯とのために彼の御国を人々の間に前進せしめんことを熱心に望みつつ、彼の忠実な (faithful) 弟子となることと彼の教の文字と精神とに厳密に一致して生きること (strictly compliance with letter and the spirit of his teachings)」(強調は本論文執筆による)であったと思う。彼は第一章「基督教に接す」の最後に、「ルビコンはかくして永久に渡られた。我々は我々の新しい主に我々の忠誠 allegiance を誓った、そして十字架のしるしは我々の額につけられたのである。我々はこの世の主と師に対して表すことを教えられてきた忠誠心 loyalty をもって彼に仕え、国ま

\*<sup>37</sup> 同上書、136-137頁、同上訳書、190-191頁。

た国を征服しつつ進み行こうではないか」\*38と書いた。

これらの引用で、“忠誠fidelity”、“忠誠allegiance”、“忠誠心loyalty”、“忠実なfaithful”、“愛と感謝love and gratitude”、“教の文字と精神とに厳密に一致して生きることto live in strict compliance with the letter and the spirit of teaching”は日本の武士道のキー・コンセプトであり、武士のnoblesse obligeであり、それは、基本的に儒教に基づいていた。内村は書いている、

「余の父はりっぱな孔子学者であって、聖人の文章と言葉のほとんど各節を暗誦することができた。それゆえしぜん余の初期の教育はその線にそっていた、そして余はシナ諸聖賢の倫理的政治的教訓を理解することはできなかったとしても、その教の一般的の感じがしみこんでいたのである。封建領主に対する忠義loyalty、親と師に対する誠実fidelityと尊敬respectsは、シナ道德の中の中心題目であった。孝filial pietyは百行の本なりと教えられた、『エホバをおそるるは知識の本なり』というソロモンの箴言に似ている。(中略)封建領主に対する忠義loyaltyは、特に戦争の時に、余の国の青年の道義観the ethical conceptionsではいっそうロマンチックな形を取った。危急にさいし領主に仕えるよう召されたときは、彼はその生命を塵のように軽く考うべきであった、もっとも高貴な死場所は君の馬前であって、屍が君の馬蹄にかけられれば無上の福いであった。——青年が師(知徳の指導者)を思う情considerationは、これに劣らず重くあった、師は彼には単に報酬主義の学校教師や大学教授ではなく、心身の配慮を完全に任せるconfideことのできる、また任せなければならぬ、真の先生であった。君the Lordと父the Fatherと師the Masterとは、その三位一体を構成していた。」\*39

1885年7月、内村はエルウインの「白痴院」での仕事を辞め、9月にはアマースト大学に入学することになるが、その間に彼は“Moral Traits of Yamato-

\* 38 同上書、20頁。同上訳書、30頁。

\* 39 同上書、9-10頁。同上訳書、14-15頁。

Damashii (‘Spirit of Japan’) \*40を執筆した。彼は日本人の昔ながらの性質には三つの顕著な特徴があると論じた。つまり、「1. 孝 Filial piety、2. 目上の者への忠 Loyalty to higher authorities、3. 目下の者への愛 Love for inferiors」である \*41。彼は、「西洋の読者に、「大和心」 Yamato-heartが<sup>4</sup>霊 spirit という点で本質的にどれほどキリスト教的であるかを示して」 \*42みようとした。彼はこの論説で、「日本人の眼には、孝はあらゆる徳の要石であるのに対し、君主 masterへの忠はあらゆる徳の王冠である。」 \*43と語り、さらに続けて、「[「ナザレの殉教者」の日本人の弟子以上に、他のいかなるキリスト教徒にも、キリストに用いられる “Master” という言葉が深い意味を持つことはない。」 \*44と言っている。「目下の者への愛」に関しては、彼は次のような考えを表明している。

「目下の者が目上の者のために為した犠牲の物語にはその物語に特有の悲哀がある。しかし、目上の者が安易や安楽を自ら断ち、ある場合には、従者のために自分の命を捨てるとき、この行為はキリスト教徒にとって、特に、「至高の者」が、我々が「彼を愛した」からではなく、彼が「我々を愛した」がゆえに、自らを崇高な犠牲に捧げたということを、つい最近教えられたキリスト教徒にとって、一層深い意味を持っている。」 \*45

「大なる者が小なる者のために、上に立つものが下にある弱き者のために苦しむ」という日本の精神を例示する物語は多くある。一例として、内村は西郷隆盛 (1828-1877) を挙げている。西郷は「彼の若い信奉者たちへの愛の故に自

\* 40 『内村鑑三全集』第1巻、113頁以下。邦訳は、亀井俊介訳『内村鑑三英文論説翻訳編上』岩波書店、1984年、2頁以下「[「大和魂」] (「日本精神」) の道徳的特徴」。この論説では内村は「大和魂」という言葉を使い、また『余は如何にして基督信徒となりし乎』では「武士道」という言葉はまだ用いられてはいない。

\* 41 同上書、114頁、亀井俊介訳書3頁。

\* 42 同上。

\* 43 同上書、120-121頁。

\* 44 同上書、121-122頁。

\* 45 同上書、129頁。



分の命を犠牲にした」\*46のである。

内村の親友である新渡戸は『武士道』で、「目下の者への愛」を、儒教の「仁benevolence」「惻隱の情the feeling of distress」から説明している。新渡戸は、「仁、惻隱の情」とは、「愛love、寛大magnanimity。他者への親愛の情affection for others、同情sympathy、憐みの情pity」であるとして、「古来から至上の徳、すなわち人間の魂のすべての特質の中で最高のものと認められてきた」と主張している\*47。

近代日本におけるキリスト教の伝道とその発展に主要な役割を果たしたものに、(1) 熊本バンド、(2) 横浜バンド、(3) 札幌バンド、の三つのグループがある。これら三つのバンドはアメリカのピューリタンの伝道師たちによって基礎が与えられた。これらの伝道師たちによって、明治時代の初めに、キリスト教は武士階級出身の若い世代の精神に「接ぎ木」された。内村も先の論説「大和魂」の中で「わが故郷のキリスト教徒のうち最も優れ、最も活動的な者はこの階級出身の若者たちである」\*48と語っているだけでなく、後には「武士道は日本国最善の産物である、然し乍ら武士道其物に日本国を救ふの能力は無い、武士道の台木に基督教を接いだ物、其物は世界最善の産物であって、之に日本国のみならず全世界を救ふの能力がある」\*49とまで語っている。

アメリカのピューリタン主義のルーツの一つに敬虔主義がある。敬虔主義の運動はフィリップ・ヤコブ・シュベナー(1635-1705)によってフランクフルトで始められ、その後継者アウグスト・ヘルマン・フランケ(1663-1727)が活躍したハレ大学はヨーロッパ敬虔主義の中心となった。そして、特に、内村と関係があるのは、ヘルムフト兄弟団の父ニコラウス・ルートヴィヒ・フォン・

\* 46 同上。

\* 47 Inazo Nitobe, *Bushido; The Soul of Japan*, published in 1900 by Leeds & Biddle, Philadelphia, and by Shokado, Tokyo. 私は *Bushido*, published by Kodansha International Ltd., 2002, 56 頁を参照した。

\* 48 『内村鑑三全集』第1巻、120頁。

\* 49 「Bushido and Christianity. 武士道と基督教」(『聖書之研究』186号、1916年1月)(『内村鑑三全集』第22巻、161頁)。Cf. John F. Howes, *Japan's Modern Prophet*, p. 236.

ツィンツェンドルフ (1700-1760) である。ツィンツェンドルフは10歳の時、「ハレ大学の王立ベダゴギウムに入学し、そこでフランケ教授の影響を受けた。」<sup>\*50</sup> 1705年、ハレ大学はデンマークのフェルディナンド四世と協力関係を結んだ。そして翌年フェルディナンド四世は二人の敬虔主義伝道師（一人はフランケの援助でハレ大学で学んだドイツ人で、もう一人はその学生）をインドのトランクバルに送った。この二人はインドに送られた最初のプロテスタント系伝道師であった。ツィンツェンドルフはこの運動に大きな影響を受けた。彼は仲間の少年たちと小さな集会「芥種の道団（結社）」the Order of the Grain of Mustardを作り、これは後年の伝道活動の伏線となった。1731年、彼はコペンハーゲンを訪問し、デンマークのクリスチャン四世の戴冠式に出席した。1741年、彼はアメリカにある教会に自由に奉仕するためモラビア教会のビショップとしての責任から辞した。1年後、彼は「伯爵」の称号と貴族の特権を棄てた、それは植民地における伝道活動をもっと効果的にするためであった。彼は「兄弟」として人に知られることになった。1744年、彼はアメリカにおける彼の運動をモラビア兄弟団あるいはルターの兄弟団と呼ぶよりもむしろ福音兄弟団と呼んだ。彼の情熱は、教派を超えた友愛を目指して働くことであり、キリストに関する福音をまだ聞いたことのない人々にもたらすことであった<sup>\*51</sup>。

私はアメリカの研究者によるツィンツェンドルフの短い伝記から引用してきたが、これはまたW・グンデルトによって書かれた論説「チンチェンドルフ伯伝」にも拠っている。グンデルトは、シュワーベンのヘルンフート兄弟団の家庭に生まれ、1900年から1901年にかけてハレ大学に学んだこともあり、内村によってツィンツェンドルフの生涯を内村の『聖書の研究』に載せるよう頼まれた。それは『聖書の研究』第9巻第11-12号と第10巻第1-4号（1906-1907年）に掲載された。また、内村の信仰の師、J・H・シーリーは1852年から1853年までハレ大学で哲学と神学を学んだ。シーリーがヘルンフート兄弟団

---

<sup>\* 50</sup> Robert L. Gallagher, "Zinzendorf and the Early Moravian Mission Movement," A Faith and Learning Paper Presented to the Director of the Faith and Learning Program and the Provost, Wheaton College, In Partial Fulfillment of the Requirements for Promotion and Tenure, 2005, p. 5.

<sup>\* 51</sup> 同上書、18頁を参照。

の影響下にあったかどうかは分らないが、彼はコネチカット州のベセル Bethel で生まれた。このベセルは、ツィンツェンドルフがモラビア教会の精神を埋め込んだフィラデルフィアのベスレヘムとナザレの近くにある。いずれにせよ、グンデルトのツィンツェンドルフ伝の出版後、内村は次のように書いている。

「余にキリストを最も明白に示して呉れた者は米国アマスト大学総理故シーリー先生である、故に余の信仰は米国人に由て伝えられし者のやうに思ふ人もあろふ、然し爾うではない、今に至て思へばシーリー先生がキリストを深く余の心琴に打ち込み給ひしは先生の非米国的信仰に由ったのである、先生は先生の信仰を独逸留学中に得給ふたのである。先生の信仰に独逸的パエチスト風のあったことは先生とパエチズム（敬虔主義と訳せん乎）とを知る者の等しく認むる所であると思ふ、先生に曾て本誌に掲げしチンチェンドルフ伯の信仰に似たるものがあつた」\*<sup>52</sup>

内村はまた、グンデルトにキェルケゴールの紹介を書いてもらう約束をしたが、これは実現しなかつた。

キェルケゴールと敬虔主義との関係に関しては、彼の父、ミカエル・P・キェルケゴールはコペンハーゲンのヘルンフト兄弟団の一員であつた。キェルケゴールと内村を結びつける媒介項となつたものに、グンデルトがおり、両者の精神的結びつきは、日本の武士道と敬虔主義にあつたと言えよう。

\*<sup>52</sup> 『内村鑑三全集』第15巻、378頁（1908年1月、『聖書之研究』95号所収「回顧と前進」）